

外国人の人権尊重に関する実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

岐阜県養老町

○学校名

養老町立高田中学校

○学校のURL

<http://jhs-takada.yoro-edu.jp/>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】 13学級、【特別支援学級】 2学級、【合計】 15学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】 461人（平成28年11月1日現在）
（内訳：1年生135人、2年生152人、3年生174人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

平成20・21年度文部科学省人権教育研究指定校

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

「自己をみつめよう」「あたたかい心をもとう」「ねばり強くやりぬこう」

【人権教育に関する目標】

「人権尊重の意識を高める人権教育の推進」

○人権教育に係る取組一口メモ

確かな人権感覚を身に付け、様々な人権問題について、仲間とともに解決に向けて行動できる生徒を育成する。

○人権教育にかかる取組の全体概要

○「人権教育の観点」を明確にした授業の実践

各授業において、人権教育を推進するための意図的な指導の立場（「人権教育の観点」）を明確にして指導する。

○人権問題に対する実践的な態度の育成を図る指導の工夫

総合的な学習の時間、「ひびきあいの日」の取組において、生徒が、主体的に課題を見つけ、自らの手で課題解決に向かう行動力を育成する。

○家庭・地域、関係諸機関との連携

授業や活動を地域に公表するとともに、生徒の地域行事への参加を促進する。
また、「養老町情報モラル スマイル宣言」の啓発をPTAと連携して行う。

○教職員の人権感覚を高める研修の実践

校内人権教育研修会の開催、各種研修会への派遣を計画的に実施する。

3. 実践事例の内容

◆国や文化の異なる方と共に生きる

(取組のねらい、目的)

本校では、目指す生徒像を「確かな自浄力と人権感覚を身に付けた生徒」とし、身近な人権問題に気づき、仲間とともに解決に向けて行動できる生徒を育成しようと、計画的に人権教育を推進している。

(取組を始めたきっかけ)

総合的な学習の時間の開始より、身近な人権問題について理解を深め、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てる場として、第2学年では、毎年「国や文化の異なる方と共に生きる」をテーマにした学習を取り入れている。

(取組の内容)

平成27年度は、学校行事「人権講演会」において、カメラマンであり一般社団法人アジア支援機構代表理事の池間哲郎さんを講師として依頼し、アジアの発展途上国の貧困問題を取り上げ、次のような取組を行った。

1 課題の設定

オリエンテーションでは、『懸命に生きる子どもたち』(池間哲郎 執筆編集)の書籍から、生徒は、貧困に苦しみながらもたくましく生きる人々の姿やその願いに触れた。

感想を交流する中で、学習課題「貧困に苦しむ人々と共に生きるために、自分たちにできることは何か」を設定し、貧困の要因を明らかにすることから追究を進めた。

(生徒の感想)

今日の学習で、テレビなどで知らされていない現実の姿を知ることができた。同じ地球に生きているのに、どうしてこれほどまでに生活の差があるのか。これからの学習で詳しく調べてみたいと思った。

2 課題の追究

追究では、「教育・産業」「歴史」「人口・環境問題」「紛争」等の視点から、それぞれキーワードを明らかにして調べ学習を進めた。生徒は、追究を進める中で、発展途上国と先進工業国との格差について、歴史的な背景や現在の経済的なかわりから捉えることにより、自分たちの生活と大きく結び付いていることに気付いた。

「人権講演会」では、講師よりアジア



各国の極度の貧困地域の中で懸命に生きる人々の姿を通して、命の尊さ、親や先生に対する尊敬の念、大切なものを分けるといふ姿勢、一生懸命に生きることがいかに大切かということ学ぶことができた。そこで、生徒は、これまでの学習からの感想や疑問を講師に伝えた。

講演会后、生徒は、貧困に苦しむ人々への支援の現状を調べ、自分たちに何ができるのかを考え話し合った。

〈題材名〉 「貧困をなくすために、何ができるのか」

〈本時のねらい〉

「貧困をなくすために私たちにできること」を考える活動を通して、自立できる支援こそが大切であることに気づき、「自立に向けた支援」について考えをもつことができる。

〈人権教育の観点〉

貧困に苦しみながらも懸命に暮らす人々には、経済的な援助こそ必要であると考えてしまうが、相手の思いに立った自立できる支援こそが必要とされていることに気づくことができる。この見方や考え方は、生徒一人一人がこれから生きる上で、困難に直面した仲間に対し、自分には関係ないと考えるのではなく、相手の思いや立場を尊重し行動する心を育むことにつながる。このことが、「共に生きる」ための力を育成することになると考える。

〈主な学習活動〉

- 講話を振り返り、本時の課題を確認する。
- 課題：貧困問題で苦しむ人々と共に生きるために、私たちにできる支援は何だろう。
- これまで、インターネットや書籍で調べた支援策を交流し、自分の考えを付箋に記入する。
- 全体で交流し、自分たちにできる支援について考える。
- 本時のまとめを記入する。



〈生徒のまとめ〉

貧困で苦しむ人々が幸せになり、その解決のために自分の生活で必要のないものを送るのではなく、相手の立場や気持ちになって一緒に考えていくことが大切なのだと思います。貧困の起こる悪循環から抜け出せるようにすることが、相手の幸せにつながります。苦しんでいる人々が貧困から抜け出し、自立ができ、自分で歩めるようにこれから応援していきたいです。

3 学習の発信

これまでの学習の成果を次の方法で他学年生徒や家庭・地域に発信した。

- 自分たちが考えた支援策を実行する。
(学校で集めた文具等を地域の民間団体よりアジア各国へ送る)
- 「いしずえ集会(学校行事)」で全校生徒、保護者に知らせる。
- 学んだことを「絵手紙」に表現して校内に掲示する。



(取組の主体や実施体制)

教職員の推進組織(心づくり委員会)

において指導計画を検討し、学年会において周知した。生徒会「いしずえ委員会」が中心となって集会活動を企画し、生徒や保護者から文具等を集める活動を行った。

(取組を実現するに当たって課題となったこと及びそれに対して講じた工夫)

生徒は、第1学年社会科で「世界の諸地域」の学習を行っているが、「貧困問題のことは、よく分からない」「貧困に苦しむ人たちは、かわいそうな人」と捉えがちである。よって、正しい知識を得て認識を深めること、自分たちの生活とかかわらせて貧困に苦しむ人々の立場を理解し、その人権を尊重する考え方を身に付けさせることを課題とした。

そのために、この問題に対して国際的に活動されている方を講師に選出し、映像資料を豊富に活用した講演会を開催した。特に、アジア各地の貧困に直面しながらも、たくましく生きる子供たちの笑顔に着目させた。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

(取組を実施する際に生じた課題)

貧困がなぜ起こるのかを明らかにする際、生徒にその要因や関連性が悪循環となり、貧困の負の連鎖が生み出されるのだと気付かせることに難しさを感じた。また、講師による講演後も、貧困問題の解決に向けて支援する人々の願いを継続的に生徒に伝える手立てを検討した。

(課題に対する対応)

貧困の要因をカードに書き出し、それぞれの要因がどのようにつながっているのかについて、小集団でカードを組み合わせながら学習を進めた。このことにより、生徒は個々の要因のつながりを考えて仲間と意見を交わし、自国だけでは貧困から抜け出すことが難しいということに気付くことができた。

また、講演会以後にも、県内で支援活動に取り組む民間団体の方を招いて講話を聞き、質疑応答を行うことで、支援する人々の願いや支援の効果を生徒に感じ取らせた。

5. 実践事例の実績、実施による効果

(取組の実績)

学習後のアンケート調査では、次のような結果であった。

(第2学年生徒のうち3段階評価で「はい」の回答割合)

設問	回答
世界の国々でくらす人への関心は高まりましたか。	97%
日本でくらす国籍が異なる人への関心は高まりましたか。	89%
世界の貧困で苦しむ人たちに支援が必要だと思いますか。	97%
自分にできる支援があれば、進んで行いたいと思いますか。	95%

また、学年末に生活を振り返ったアンケートでは、次のような結果であった。

(第2学年生徒のうち2段階評価で「はい」の回答割合)

設問	回答
自分と同じように相手のことを大切にしている。	90%
人の気持ちが分かる人間になりたい。	92%
考えや感じ方には、人それぞれ違いがあってよいと思う。	99%

(取組が効果を上げた実際の事例)

生徒がこの学習の一環として、支援のための文具等を集める際、少しでも多く集めようと家庭や地域に熱心に呼び掛けることができた。さらに、送付する文具を丁寧に整理しながら、「どのように使うのか分かるかな」「鉛筆削りも一緒に送った方がいいよね」など、受け取る相手を気遣う姿が見られた。

また、生徒は第3学年社会科「人権と共生社会」の学習において、この取組を想起し学習を進めた。特に、在日韓国・朝鮮人への差別の撤廃について、「このような差別は許せない」「国だけではなく、私たち自身が考え行動していくことが大切だ」などの感想をもつことができた。

(取組の実施から得られた知見・経験により改善を図った事項)

いじめをなくし、仲間を思いやる温かい学級集団をつくり上げるため、学級活動における話し合いを充実させた。特に、自己の言動や行動を振り返り、相手を大切にしたい行動ができるように、「高中笑顔の輪の誓い」として一人一人が意思決定をし、仲間とともに生活向上の取組を行った。

高中笑顔の輪の誓い

- ・ 仲間が困っていたら、声をかけていきます。
- ・ 仲間の呼びかけに応えられるようにします。

6. 実践事例についての評価

(取組についての評価及びその理由)

生徒は、貧困問題とその地域に生きる人々の人権問題を学ぶ中で、「正しい知識をもつことが、相手の立場を理解し相手を尊重することにつながる」「相手が苦しむ問題は、自分には関係ないと思えるのではなく、共に生きる人として、自分にできることは何かを考え行動していくことが必要だ」と気付くことができた。

理由として、生徒が学習の成果を「小集団で他学年に発表する」際に、貧困問題が日本に比べ私たちにとって無関係であるという考え方は改めなければならないこと、相手のことを考えた支援が必要であり、自分たちが行動していくことを強く訴える姿が多く見られた。

〈生徒の発表〉

貧困から抜け出すための教育や技術力を支援することで、現地の人々のよりよい国にしていきたいと願う気持ちを大切に、その国が自立し発展できるようにすること。このような支援の在り方が、貧困に苦しむ人々を支える本当の支援だと分かりました。

〈保護者や地域住民からの反応〉

学習の成果を保護者に公表した「いしずえ集会」では、多くの保護者が熱心に生徒の発表を聞き入れることができた。そして、支援のための文具等の提供にも協力していただいた。また、年度末の学校評価アンケートでは、次のような結果であった。

〈保護者・地域の方の学校評価より〉

(4段階評価で「よくできている」「できている」の回答割合)

設問	H 2 6	H 2 7
学校は、目指す生徒の姿「確かな自浄力と人権感覚を身に付けた生徒」の育成に取り組んでいるか。	7 2 %	8 3 %
学校は、豊かな心、思いやりの心をもった子供を育てようと努力しているか。	7 5 %	8 0 %

〈現在、実施に当たって課題と感じていること〉

貧困の要因や支援の在り方に焦点を当てたことで、支援する人々の考え方や思いに触れることができた。さらに、青年海外協力隊など、現地で長期に支援を行う方との交流により、実際に支援を受ける方の現状や思いに触れるようにしていく。また、(取組の実績)で示したように、日本で比べ外国籍の方への理解と関心を深めるために、この取組の中で学習していく計画を追加していく。